

## ＜シンポジオン＞

現代ギリシア語・文学研究昨今  
— 駐日ギリシア大使を囲んで —

浮田 三郎

今回の研究発表会には、駐日ギリシア大使ヴァシス御夫妻が御参加くださるということで何か特別な企画を考えてみた。予めギリシア大使館の柳田氏と連絡をとり、大使がどのようなことを期待されているかという情報を得て、表記のようなテーマのもとで、シンポジオン（あるいは座談会）を開いてみようということになった。

予定は、一時間ほどの短い時間なので、とりあえず形式的に、パネラーとして、ヘルソネス書房の山口喜雄氏と私（浮田三郎）が話題を提供することにした。

先ず、山口氏には、ギリシア語・文学あるいはギリシア一般に関する書籍の仕入れや販売の際の御苦労談と販売状況などを話してもらい、日本におけるギリシアに関する書籍の販売・購買を通して、日本でのギリシア語・文学研究の動向を考えてみた。

続いて、浮田が、「現代ギリシア語・文学研究雑感」と題して、日本の現代ギリシア語・文学研究の祖、関本至先生の御業績に関して話を進めた（著書・論文関係はプロピレア第3号参照）。現代ギリシア語研究の初め頃は文献を入手するのが想像以上に大変であったこととか、関本先生の授業のことなどにも言及した。

また、浮田が関本先生に読書会を開いてもらったこととか、そのお陰で、ギリシアに留学することができたこと、また、ギリシア留学時代（1975.10-1979.9）のことも話題にした。

レスキ（アテネ大学附属の語学研修機関）に於ける語学研修では、最初、実践的な「聞く、話す、書く」の三技能の点で苦労した。また、ディモティキ（9-5月）に加えてカサレヴサも（1カ月間）研修を受けた。ちなみに、翌年からはカサレヴサの研修はなくなった。言語は急速に動いていた。

ディモティキとカサレヴサに関する問題点では、友人の運転手が、テレビ

で大統領の演説を聞いて、「ガンモット、カサレヴサ。純正語は難しい。」などと言ったこととか、移民管理局で、代筆家が多かったこと、そして、そのうち、ディモティキがカサレヴサと同様に公用語として認められたことなどを話題にした。

イオータキズモスの問題点や古典に対する現代のギリシア人の関心と意識に関しては、私たちににとっては少々寂しい気持ちができるような動向が感じられた。

さらに、モノトニコシステムに関しては、1982年9月1日から、政令が施行され、教育機関の教科書、新聞など様相新たになった。

現代ギリシア人に人気のあった現代文学作家は、小説では、カザンザキス、サマラキス等、詩では、カヴァフィス、セフェリス等であった。

そして、ヴァルカン研究夏期講座についても述べた。この講座では、短期間で相当密度の濃い、色々な点からのギリシア研究ができるという点で、特筆に値する。例えば、上級コースでは、カヴァフィス、カザンザキスなどの文学作品をテキストにして解釈、作品分析などをし、ギリシア文化に関しては、古代遺跡、民芸、民族舞踊（ハサビコ、ゼヴェキコ、シルタキなど）を見学、実践したりするプログラムがあった。

ところで、1990年前後の日本における現代ギリシア語学習あるいは教育に関しては、第一回研究発表会の時にも話題になったが、東京辺りではかなりの数の授業が行われているようである。（このことは、野中氏や山口氏にも尋ねてみた。例えば、朝日カルチャーセンター、東京大学、慶応大学等）

広島では、広島大学文学部の言語学の授業として、「言語学特講Ⅲ」と言う科目名のもとに現代ギリシア語の授業が開設されている。

大使に御発言を求めると、大使の御興味は、当研究会がどのような活動をしているか、また、広島でのギリシア研究の現状はどうかということだったので、大体上記のようなことで回答になったと思う。また、なぜ当研究会が広島で発足したのかという御質問に対しては、上述の歴史的なことを考えてもらえば分かるように、関本至先生の御功績であるというのが万人の認める答えであった。

なお、関本先生は、御病気の身であったので、奥様が御同伴になり、研究会の最後まで参加され、大使御夫妻とも和やかに御挨拶を交わされておられた。

そして、このシンポジオンは、さらに、ギリシア大使御夫妻を囲んで、大使の御好意によるギリシアワインを傾けながらの、和やかな懇親会へと流れていった。